

## 後漢の太子二傳と諸侯王の傳

齊藤 幸子

### はじめに

前二二一年、秦王政は東方六国を降し天下を併合した。その頂点に相応しい称号として、光り輝く唯一無二の支配者を意味する「皇帝」号を名乗り、その子孫が二世、三世と数えて万世まで続くことを願った。しかし、秦王朝は三世で亡び一五年の短命に終わり始皇帝の願いはかなわなかった。

秦の滅亡からおよそ三〇年後、前漢文帝時の賈誼<sup>(1)</sup>は、天下を統治する上で秦が犯した誤りを「過秦論」として文帝に提示し、その一つが後継者対策であると指摘した。「天下の命は太子に縣<sup>か</sup>かる。太子の善は早くに論教すると左右を選ぶことに在り（天下之命縣於太子、太子之善在於早論教与選左右）」として、国の行く末は、太子にかかつており、早期からの太子教育と、太子を教導する左右のものの人選こそが大事であるとした。太子とは、国君の後継者候補の筆頭として、

政治に参与し祭祀を代行して皇帝を輔弼する存在であるが、太子としての期間はまた、皇帝となるための養成期間でもある。王朝国家が実質的には血を以て父から子へと世襲される以上、後継者育成は皇帝が行うべき課題の一つであることは間違いない。太子教育に何が求められ、どのような人びとが太子教育を担ったのか、その内実を知ることが、父帝が太子に次期皇帝として何を望んだのか、すなわち皇帝の在り様ひいては国家の統治理念につながると考える。この観点から、筆者はかつて前漢を対象として、太子の教導を中心に行う太子二傳（太子太傳と太子少傳）について述べた<sup>(3)</sup>。また、諸侯王（国）の存在は、有事の際に、朝廷を支える藩屏としての役割があるが、帝室に後嗣がない場合には、劉氏の血縁を以て帝位を継ぐ可能性のある存在であることから、前漢の諸侯王の傳についても考察を加えた<sup>(4)</sup>。いずれも就任者を史書から網羅的に抽出し、人物の特徴・就官前後の履歴等を分析することにより各々の役割を検討し、前漢の皇帝が太子及び諸侯王教育に何を求めたのかを探った<sup>(5)</sup>。本稿では、対象とする時代を後漢に移し、後漢の太子二傳と諸侯王の傳について考察する。後漢は、儒教を統治イデオロギーの中核に据えた最初の王朝であり、太子教育の面でも儒教国家<sup>(6)</sup>としての特徴があり、前漢とは異なる側面が見えてくると思われる。また、後漢後半では諸侯王から直接帝位に即くケースが多いことから、太子二傳を通して後継者教育を受けた皇帝と、諸侯王として傳に教導され急遽帝位に即いた皇帝との在り様の相異にも着目したい。

## 一・後漢の太子二傳

### （一）前漢太子二傳の役割推移

後漢の太子二傳を検討する前に、筆者の前稿に拠りつつ、前漢の太子二傳について確認しておきたい。

高祖劉邦によって建国された前漢は、二一〇年存続した長命な王朝であり、その間、廢嫡されたものを含め一一名の太

子が存在した。前漢では、皇子が正式に太子に立てられると、太子家を称し太子官属が備えられる。太子教導は、太子太傅と太子少傅（副官）に委ねられ、二傅はいずれも太子輔導と共に太子官属の統括を兼ね、官秩は、共に二千石である。前漢の就任者をみると、就任期間は大体四、五年が多く、七、八年と長期にわたる者もある。就任年齢は熟年に達した六、七〇歳代が占める。武帝期以前と宣帝期以降では就任者のタイプに大きな違いがある。武帝期以前では、恭敬・謹直・敦厚等と称される人柄が重視され、吏民に慕われる「長者」的人物が多く選任されており、彼等の学識には重点が置かれていない。当該期の太子二傅には「傅」という言葉の語源である「守る・育てる」という後見者の役割に重点が置かれており、何かを積極的に「教える」という側面は見られない。

前漢後半、宣帝期以降になると、儒学者が太子二傅に登用されるようになり、彼等が直接太子に学問を教え始める。宣帝の施政は、王霸（徳治と法治）併用を旨としており、儒者が主張する徳治至上主義をむしろ敬遠していた。しかし、宣帝が即位した時代は、地方豪族や官吏層に儒学思想が浸透し始めており、社会の趨勢がもはや儒学を無視できない状況にあった。これに対する宣帝の施策は、朝廷（皇帝）が望む方向に儒学を主導することによって、地方豪族層や儒者との共存を図ることであった。儒学者を太子の教導責任者として登用したことも、儒者との共存を世に示す目的があると考えられる。従って、その人選には十分慎重を期し、宣帝が太子二傅として選んだ儒学者は、経書の理想は理想として受け止めるが、常に現実には則した客観的・建設的思考を有する学者であり、決して經典に偏って理想の実現に固執する者ではなかった。

次の元帝以降の太子二傅も皆儒学者であるが、宣帝の人選意図とは大きく異なる。儒学に傾倒した元帝は、古礼を信奉して理想に奔る儒者を積極的に受け入れ、太子太傅や太子少傅に就けた。元帝期の二傅が行ったことは、彼等の理想とする古礼遵守と礼容習得を太子に説くことであり、彼等は古礼の「唱導師」として、太子のみならず皇帝にもそれを求め、今まで臣下が触れることのなかった帝室の伝統や祭祀制度の改革を主張した。太子が皇帝に即位した後、彼等は丞相な

どの重職に留まり、皇帝に古礼遵守を求め続けた。皇帝はもと傳としての彼等を憚り、帝室内部の反対や自分の考えを抑えて彼等急進的改革派の言を納れ、結果的には高祖はじめ先帝が定めた漢朝の伝統や祭祀制度が大幅に改革された。それは同時に皇帝權威の失墜・帝室の弱体化を世に露呈させた。

前漢二〇〇余年の間に、太子二傳の役割は、次の様に推移したと考えられる。すなわち、武帝以前は太子の後見者の存在である「傳」、前漢後期宣帝期では、「教える」という役割が加わることで「師傳」となり、元帝以降前漢末においては、古礼遵守を先導する「唱導師」的な役割である。

以上述べたところの前漢二傳の在り方の変化を踏まえて、次に本論の主題とする後漢の太子二傳就任者をみていこう。

## (二) 後漢の太子二傳

【表1】は、後漢皇帝の即位前の状況を示したものであるが、【表1】と後漢の皇帝系図<sup>9)</sup>を参照しつつ、後漢皇帝が太子期を経たかあるいは諸侯王から直ちに皇帝となったのかを確認しよう。一九五年間存続した後漢王朝であるが、その間、光武帝を含む一四名の皇帝が即位し、八名の太子(彊・莊・烜・慶・肇・隆・保・炳)が立てられ、うち三名(光武帝期の彊・章帝期の慶・安帝期の保)が廃嫡されている。後述するが、太子保は廃嫡され済陰王に遷されたが、少帝懿の没後、宦官によるクーデターが起こり、一年余で帝位に即いた。従って、太子期を経験し皇帝と為ったものは六名(莊・烜・肇・隆・保・炳)であり、そのうち、和帝の子である隆(殤帝)は生後百余日で、父帝没後当日に立太子され同夜に帝位に即き在位八か月で没し、順帝の子炳(冲帝)は二歳で太子に立てられ、四か月後に即位し、在位四か月で死去している。以降、質帝・桓帝・靈帝・献帝は、傍系の王・侯から太子期を経ることなく帝位に即き、少帝弁は封国されず皇子の身分から即位した。質帝から献帝までの七六年間は太子が立てられていない。後漢王朝全体としてみると、太子空位期間は併せて一三六年余であり、これは後漢代の三分の二にあたる<sup>10)</sup>。従って、自ずから太子太傅・少傅の数は限られてくる。【表2】

は、後漢の太子太傅・太子少傅就任者であるが、確認できたのは、太子太傅五名、太子少傅三名である。

建武一九年（四三）、光武帝は東海王莊を正式に太子に立て、最初の太子彊を東海王に遷した。その二年前に他の皇子も王として封国されている。しかし、まだ太子の傅や太子官属が定まらず、諸侯王国の傅も欠員の状態が多かった。司徒掾（丞相属官）であった班彪は、下記のように上言しており、当該期の人々の太子二傅に対する考えが分かる（『後漢書』列伝三〇上、班彪伝。以下『後漢書』からの引用の場合、紀・列伝の別と、列伝については巻数及び列伝名を記し、書名は省略する）。

漢興るや、太宗は鼂錯をして太子を導くに法術を以てせしめ、賈誼をして梁王に教うるに『詩』『書』を以てせしむ。中宗に至るに及んで、亦た劉向・王褒・蕭望之・周堪の徒をして文章儒学を以て東宮以下を保訓せしめ、其の人を崇び簡<sup>えら</sup>んで、徳器を就<sup>な</sup>し成さしめざるは莫し。（中略）宜しく博く名儒の威重有つて明らかに政事に通ぜる者を選んで以て太子太傅と為し、東宮及び諸々の王国に官属を備え置くべし。

漢興、太宗使鼂錯導太子以法術、賈誼教梁王以『詩』『書』。及至中宗、亦令劉向・王褒・蕭望之・周堪之徒、以文章儒学保訓東宮以下、莫不崇簡其人、就成徳器。（中略）宜博選名儒有威重明通政事者、以為太子太傅、東宮及諸王国、備置官属。

ここでは、太子太傅としての条件は、「名儒」が前提となっており、その上で「威厳が有り政治を知悉している者」とされ、そのような人物を尊び選び「文章儒学を以て保訓」させることによって、太子は人間としての器量を完成させることができる。これは、『大戴礼記』保傅篇や『礼記』文王世子篇<sup>12</sup>の主旨に添ったものであるが、「儒者」と限定していることが着目される。光武帝はこの献言を納れた。従つて、後漢の太子太傅は、「威厳をそなえ政治に通じた儒者」であり、「儒学を以て輔導する」ことがその役割と認識され、そのような人物を太子太傅に選び、その後に太子官属が置かれると認識されていたということである。

しかし、『続漢書』百官志には、

太子太傅一人、中二千石。本注に曰く、職は太子を輔導することを掌る。礼は師の如し、官属を領さず。

太子太傅一人、中二千石。本注曰、職掌輔導太子。礼如師、不領官属。

とあり、太子太傅は「師」として礼遇され、太子輔導を専らとするようになり、太子官属の統括はしない。一方、太子少傅については、

太子少傅、二千石。本注に曰く、また輔導を以て職と為し、悉く太子官属を主る。

太子少傅、二千石。本注曰、亦以輔導為職、悉主太子官属。

とあり、太子少傅が官属を率い、かつ太子の教導も兼ねるようになる。官秩は、太子太傅が中二千石と昇格して中央の大臣クラスと同等となる。『通典』卷三〇には、漢魏故事として、

太子は二傅に於いて弟子の礼を執り、皆な書を為すに令と言わず。少傅は臣と称するも、太傅は不臣。

太子於二傅執弟子礼、皆為書不曰令、少傅称臣、而太傅不臣。

とある。これは、内容的にみて後漢の太子二傅を述べたものであるが、太子は二傅に対して弟子の礼をとり、二傅への書簡には令（命令）の形式を取らないとあり、少傅は臣下であるが太傅は臣下ではないと明言されており、これに拠ると、太子太傅の性格は完全に「師」である。このことを踏まえた上で【表2】に戻り、就任者の一人一人について、やや冗長となるが、その経歴や太子の傅としての役割を検討してみよう。

## 1. 光武帝・明帝期

後漢最初の太子は彊であるが、彼は建国一年後の建武二年（二六）、二歳で立太子されている。生母が郭皇后であることから嫡長子と思われるが、定かではない。彊の太子在位期間は一七年であるが、その間、六歳から七歳までは王丹、そ

の後の一二年は張湛が太子太傅を務めている。立太子直後から五歳までの太子太傅は確認できないが、前述したように建国後数年は、天下はまだ戦乱の中にあり、太子を立てたものの太子二傅はまだ置かれていなかったと考えられる。

さて、王丹であるが、彼は、家に千金を積むほどの富豪であり、隠居して志を養い、困窮者の救済に力を注いでいたとされる。京兆の人で、前漢末（成帝・哀帝時）に州郡に仕えているが、王莽の時には徴されても出仕しなかった。伝には「資性方潔にして彊豪を疾惡す（資性方潔、疾惡彊豪）」とあり、王丹が郷邑の農民を励まし護って、その生活上に励んだことから、一〇余年後にはその地方の風俗が篤実になったという。西征中の前將軍鄧禹が軍糧に窮した際は、宗族を率いて麦二千斛を上納し、左馮翊に任じられるが、病を理由に務めようとしていない。その後、徴されて太子彊の太子少傅となるが、賓客が薦めた士を官吏に推挙し、その士が罪を得たことで連坐し官を退く。その客は慙じて自分から王丹との交わりを絶ったが、後、王丹はその客を呼び「子の自ら絶つ、何ぞ丹を量ることの薄きや（子之自絶、何量丹之薄也）」と告げ、旧来通り接したという。その後、光武帝に再び徴されて太子太傅に就くが、一年余で位をゆずり天寿を全うした（列伝一七、王丹伝）。その言動から、多分に黄老的・任侠的であり、前漢前半の太子太傅にみられる「長者」的な風を備えており、儒学者という側面は乏しい。

王丹に替わって彊の太子太傅となったのは、張湛である。建武七年（三一）から太子が廢嫡されるまでの一二年間を務める。扶風平陵の人で、前漢末に、二千石と為り、王莽時に太守・都尉を歴任し、建武初、左馮翊となり、光禄大夫を経て太子太傅となっている。儀則や礼容に精通した人物であり、彼が礼儀に厳格であったことは、光武帝でさえ白馬に乗った湛を見ると、「白馬生且まさに復た諫めんとす（白馬生且復諫矣）」と言ったという程であり、三輔では、「儀表」と称され人々の模範とされたとある。建武一七年（四一）、郭皇后が廢され太子彊は退位を願ひ出る。この時、張湛は、病と称して朝見せずそのまま職を辞した。前漢の叔孫通のように身を挺して廢嫡に反対することはしていない。太子彊は「去就に礼有り」として光武帝が嘉したが、張湛の教導によるものであろう。太子太傅離官後、光武帝はしばしば湛を存問賞賜してお



り、太中大夫から大司徒（丞相）に任じたが、病と老齢により朝見することが困難となり二か月で職を去り、数年後に家で没した（列伝一七、張湛伝）。『礼記』を学び礼容に通じていたことから、儒学者とみなすべきであるが、前漢末に現れた学問的議論を事とする儒者のタイプではない。

太子莊（明帝）の太子太傅は張佚である。建武二八年（五二）、光武帝が太子莊の太傅として誰が適任かを群臣に問うが、皆、帝の意を汲んで当時執金吾であった陰識（太子生母陰皇后の兄）を推薦したとされる。莊が太子となったのは建武一九年（四三）であることから、立太子後既に九年が過ぎている。先の光武帝の諮問に対して、博士張佚が「今、陛下の太子を立つるは、陰氏の為なるか、天下の為なるか。即し陰氏の為なれば、則ち陰侯可なり。天下の為なれば、則ち固に宜しく天下の賢才を用うべし（今陛下立太子、為陰氏乎、為天下乎。即為陰氏、則陰侯可、為天下、則固宜用天下之賢才）」として陰識の登用に反対した。この発言は、前漢宣帝期に外戚許氏による太子の監督保護の申し出を断った太子太傅疏広の言と通じるものである。宣帝は疏広の言を称えそれを納れたが、光武帝もまた張佚の意見を善しとし、その場で張佚本人を太子太傅に任じたという。その時の光武帝の言葉として、次のようにある。

傳を置かんと欲するは、以て太子を輔けしめんとしてなり。今、博士は朕を正すことを難らず、況や太子をや。

欲置傳者、以輔太子也。今博士不難正朕、況太子乎。

将来国を担う太子を輔け正しく導くことが、傳に期待することであるとし、今自分を正すことができた張佚なら太子を正すことができるとした（列伝二七、桓榮伝）。群臣の居並ぶ前で発せられたこの言葉には、光武帝の治世に対する公正さを広く吏民に知らしめる意図が働いたものと思われるが、光武帝自身、前漢呂氏・王氏の外戚の禍を大きな戒めとしたためでもある。博士張佚の専門の学についてはわからない。

光武帝はこの時、同時に儒学者の桓榮を太子少傅に任命している。彼は弟子四〇〇名を率いる『尚書』の学者であり、すでに九年にわたって太子に授講していた。光武帝は、太子の傅だけではなく三<sup>(20)</sup>公にも儒学者を登用しているが、桓榮を



傳に選んだ理由は、光武帝が彼の履歷・人間性・容儀・学識を尊崇していたことに由る。桓榮は長安で「歐陽尚書」を学び、後漢建国前の戦乱期には弟子達と共に山谷を居処として自守し、学問を諦めずに長江・淮河地域で教授していた。

建武十九年（四三）、莊が太子に立てられた時に、太子の為に明經（儒学に通じたもの）を求めるが、桓榮の弟子であった何湯が高第（最優秀者）に拔擢され『尚書』を講じた。何湯の講義を聴いていた光武帝が師の名を訊ねたことから、桓榮がただちに徴され、議郎に任じられ太子に授講するようになり、さらに命によって朝会毎に公卿の前で經書を講じた。その識見は、「生を得ること晩きに幾し（得生幾晩）」と光武帝を感動させ、その礼に適った容儀応対は「これ真の儒生なり」と言わせる程であつたとされる。好學で知られる光武帝であるが、長安の太學で『尚書』を学び大義に通じていることから、桓榮の講説を高く評価したものであろう。桓榮はその後「歐陽尚書」の博士となり、太學での御前論議においては、その学識・容儀は「儒者之に及ぶこと莫し（儒者莫之及）」とされ、その言動は常に温和恭敬でゆったりとしていたとある。光武帝の命により、五年にわたって太子宮に止宿して授講しており、その後は彼の弟子である胡憲が侍講を務め、桓榮は月に一度太子宮で教えていたが病を得て休職し、その間、太子は使者を遣わして見舞いの品を贈り、家族の安住を約束したという。病が癒えた後の太子少傅就任であり、太子は二五歳、桓榮の年齢は七〇余歳である。<sup>23</sup>

後、太子の學が成つたとして太子少傅を退く謝辭を提出する。その辭には、

今、皇太子は聰叡の姿を以て經義に通明す。古今觀覽するに儲君副主（いずれも太子の稱謂）の能く精を専らにし博學なること此くの若き者莫きなり。これ誠に國家の福祐、天下幸甚なり。臣、師道已に尽き、皆な太子に在り。

今皇太子以聰叡之姿、通明經義。觀覽古今、儲君副主、莫能專精博學若此者也。斯誠國家福祐、天下幸甚。臣師道已尽、皆在太子。

とあり、桓榮は「臣」と自称し、太子の勤勉さと、それによつて修得した礼容と學識を讃え、自分が教える事はもう無く全て太子に備わつたとする。これに対し太子は、これからも桓榮を師と仰ぐことを返信している。建武三〇年（五四）、

太常<sup>24</sup>となり、明帝即位後は帝の慰留により太常に留まる。明帝は太常府に赴き、桓榮の席を西に設けて東面させ、几杖を備え、驃騎將軍東平王蒼をはじめとする百官及び桓榮の門生数百人を一堂に会して帝自身が經書の講義をし、「太師是在り（太師在是）」として桓榮が自分の「太師」であることを表明している。かつての太子少傅はここで皇帝の師である「太師」となった。永平二年（五九）、太学内に明堂・靈台・辟雍<sup>25</sup>が完成した際、明帝は百官群臣の前で桓榮を「国五更<sup>26</sup>」として「養老の礼<sup>27</sup>」を行い、自ら『尚書』を講じて十余年にわたる桓榮の教導とその徳行を称え、関内侯に封じて食邑五〇〇〇戸を与えた。明帝紀に范曄（『後漢書』撰者）が述べているように、明帝は一方では刑理に関心を持ち、法の適用は情を尽くしながらも厳密なものがあつたようである。しかし、決して冷酷な法治主義に陥らず、いわば外儒内法の形にとどまったとされ、刑罰を緩くして仁義を重んじた儒家的精神を施政の第一義としたとされる。<sup>28</sup> ここにも桓榮による教導の成果があると考えられ、光武帝にとって理想的な皇帝像が明帝の姿として表現されたということであろう。漢代では、君子の学問として『尚書』が重視されており、『礼記』王制篇には、国君太子をはじめ支配者階級の子弟は大学において四術（詩・書・礼・楽）の習得を以て学業を完成すると記されているが、この場合の「書」は『尚書』の原初的なものを指し、古代の聖王堯・舜・禹などの言動に仮託して為政者の施政に臨む心構えを示したものである。<sup>29</sup> 『礼記』文王世子篇には、父である君主は、太子に「父子君臣の道」を習得させるために「父子君臣の道」を知悉している人物を太子太傅に任じ、太子太傅は、自分の日常の行動からそれを論じたとある。この「父子君臣の道」を筆者は「孝」と「忠」と解したが、狩野直喜氏は、それは「情愛」であるとする。<sup>30</sup> 父子の道は、家庭における「父子兄弟夫婦間の情愛」であり、君臣の道を「一国も天下も一の大なる家族」と考え、「君臣の堅き結合は、父子と同じき愛すなわち愛情が基礎」にあるべきであり、これを示すことが君主の徳であると指摘されている。これは、『尚書』の精神が分かり易く説かれたものであり、桓榮の教導もこの考えを基に行われたと推察する。

光武帝はかつて太子が戦術について質問した折、「戦争のことはお前の知る必要はない」と応えており、<sup>31</sup> 隗囂・公孫述

平定後は、軍事遠征をなるべく避け、三公や大臣及び郎官を集めて経書の道理を講義したとある（光武帝紀下）。光武帝は、太子の世が、礼教によって風俗が教化され、人々が郷里に安住できることを心から望んでいたと思われ、その実現に向けて、先ず桓榮に一〇余年間の長きにわたって太子教導を委任したのである。光武帝の意図した太子教育は、太子少傅桓榮と好学かつ努力家の太子（明帝）によってほぼ希望通りの結果になったと言える。後漢を通して、桓榮の子孫は代々『尚書』の宗家として存続し、多くの弟子が公卿や国相に就いており、「中興にして桓氏尤だ盛ん（中興而桓氏尤盛）」であつたと記されている（列伝二七、桓榮伝）。

太子少傅甄宇については、列伝六九下儒林伝に、北海出身で「嚴氏春秋」に通じ弟子が常に数百人おり、建武中（二五—五六）州の従事と為り、光武帝に徴されて博士となり、太子少傅になったとあり、おそらく桓榮の後任であろう。「清静にして欲少なし（清静少欲）」とある。

明帝期は、張興が太子少傅に就任している。伝に拠ると、潁川の人で、「梁丘易」を教授し、建武中に孝廉に推挙されて郎となるが、病を理由に辞してもとの生活に戻り、その後、司徒府に召され、再び孝廉に推挙され博士に遷ったとある。その後、明帝初、近侍して顧問應對を掌る侍中祭酒（筆頭侍中）に任じられ、永平一〇年（六七）に太子少傅となり、太子烜（章帝）の一歳から一五歳まで四年間を務めており、この間、明帝がしばしば経術（儒学を以て政治を行う政治術）について張興の見解を求めたとある。このことから、その名声を聴いて師事する者が全国から集まり、門人名簿には一人弱が記名したという。彼は「梁丘易」の「宗」（第一人者）となり、太子少傅として没した（列伝六九上、儒林伝、張興伝）。

## 2. 章帝期以降

章帝期、最初の太子慶が二歳から五歳まで在位したが、太子太傅は確認できない。その後、慶は竇皇后的意向により廃嫡された（皇后紀竇皇后条及び列伝四五、章帝八王伝、清河王慶伝）。

安帝の永寧元年（一二〇）、当時安帝に代わって政治を行っていた鄧太后によって安帝の子保が六歳で太子に立てられ、桓焉が太子少傅に就任し、一か月余で太子太傅に昇格する。しかし、母の喪に服するために官を辞しており、就任期間は一年ほどである。桓焉の祖父は上述した桓榮であり、桓榮没後、桓氏は郁・焉に至るまで代々家学である『尚書』を教え、弟子数百人を擁していた。郁は、明帝に親厚され、常に禁中で経書及び政事について明帝の諮問に応えたという。太子烜（章帝）・幼少時の和帝に経書を教え、都合三代（明帝・章帝・和帝）にわたって禁中で講受し、太常に至り在官のまま没した。桓焉自身は父郁の任を以て郎となり、安帝に『尚書』を教え、三遷後、侍中を経、歩兵校尉を務めた後の太子少傅就任である。保の七歳の時に鄧太后が没しており、保はその三年後に廃嫡され済陰王に遷されている。廃嫡の背景には安帝のもと乳母王聖と太子の乳母王男の対立があり、それに宦官が絡んで王男らが殺され、王聖派が太子を誹謗したことによる。保が廃嫡された時、もと太子太傅桓焉・太僕来歴・廷尉張皓などの儒者官僚は、太子はまだ幼く乳母等の争いに関わっていないこと、廃嫡は国家の大事であり慎重を期すべきこと、「忠良な」傅を付けて保を太子に留め置くことを進言した。しかし安帝は、「廃嫡は天下の為に行うのである」とし、諫言した者を「大典を理解せず」、「外は忠直を示すが、心中では太子即位後の榮転を願う輩」として彼らの諫言を斥けた（列伝五、来歙伝、来歴伝）。彼らは儒教の教養を備え、政界の長老として衆望ある人々であるが、安帝は彼らの進言には耳を傾けず、もと乳母王聖と宦官の讒言を信じたのである。安帝はその半年後に死去し、済北王寿の子である北郷侯懿（章帝の孫）が即位する。懿の年齢は不明であるが、少帝とあり幼いことは確かであろう。<sup>38</sup>懿の擁立は、安帝皇后閭氏とその外戚・乳母王聖・宦官の意向によるものである。しかし、少帝懿は即位七か月後に没した。延光四年（一二五）末に、孫程ら宦官一九人のクーデターが成功して、廃嫡された保が順帝として即位する。保のもと太子太傅桓焉は、帝の太傅として迎えられている（列伝二七、桓榮伝、桓焉伝）。

狩野直禎氏に拠ると、後漢興国から丁度一〇〇年目の順帝即位時の世相は、名節が重んじられ礼教主義が貫徹していたが、帝室では幼帝が擁立され皇太后が臨朝し外戚の専横がなされており、これを憂える礼教派の人々が全国各地から集ま

り活動を起こしはじめており、この現象が後漢末の「党錮の獄」にまで連なつたとされ、桓焉ら太子廃嫡に反対した人々は、いずれも後世のいわゆる清流派<sup>40)</sup>に結びつく傾向にある人々であるとされる。<sup>41)</sup>

杜喬は、順帝末の建康元年（一四四）、二歳で立太子された炳（沖帝）の太傅に就任した。代々二千石の家柄であり、「韓詩」「京氏易」「歐陽尚書」を修め、少くして孝廉に推挙されて司徒に辟召され、地方長官を歴任した。順帝末、侍中となり、命により「八使」の一人として地方巡察を行った折、太山太守李固の施政を天下第一と称える一方、当時朝廷で実権を握っていた外戚筆頭の大將軍梁冀の一派が地方で悪政を行っていることを弾劾した。帰還後、太子太傅に就任したが、順帝が死去して炳が二歳で皇帝位に即き（沖帝）、杜喬は大司農<sup>42)</sup>に遷っている。沖帝は即位四か月で没し、その後即位した質帝が梁冀によって弑され、桓帝が即位する。杜喬は大尉として三公に至る。終始、真向から梁冀の専横を批判し続け、阿ることはなかったとされ、遂に、志を同じくする李固と共に捕らわれ獄中で死去した。范曄は、順帝以降皇統が度々絶え、梁冀が朝廷を蹂躪している中で、桓帝を前漢の文帝や宣帝のようにあらしめようとするため、李固と杜喬が讒言者の犠牲になったとし、義・節を生命より重んじた忠臣と評価している（列伝五三、李固伝及び杜喬伝）。彼らの死が、やがて先述した「党錮の獄」に見られる党人の結束に結びついたものであろう。

このようにみてくると、安帝期以降の太子は保と炳のみであり、廃されあるいは夭折し、いずれも太子教育が本格的に行われた期間はほとんど無かったことである。桓榮の意志を継ぐ桓焉の見識や、後漢の帝室を文帝や宣帝期に戻そうとした杜喬の忠義と熱意が太子教導に活かされることはなかったのである。

### （三）後漢の太子二傳——まとめ——

後漢の太子二傳は、熟年の儒学者が占める。彼らは臣であることをわきまえ、帝室内部までは介入することはせず、あくまでも皇帝權威を尊び、皇帝こそが民を安寧させ得る存在であると認識していた。その上で、太子を礼教国家に相応し

い君主とすべく儒学を説き、治世に臨む根本精神を示そうとした。後漢の太子二傳の役割は、儒学による教導が主体であり、太子を礼教国家の君主として育成することにある。光武帝期の太子二傳は、もはや完全に太子の「師」であり、前漢武帝期以前のように、学問を教えず見守るという後見者の要素は後退し、また、元・成帝期の太子二傳にみられるような改革的急進性はない。光武帝期の太子教育の成果、すなわち、光武帝の意図した礼教国家の君主としての姿は、太子即位後の明帝によって具現化されたと言ってよい。この意味においては、後漢初の後継者教育は太子二傳の人選と太子の努力により成果を見たといえよう。しかし、早くも、章帝期になると、皇帝は皇后の意向に引きずられて正当な理由無く太子を廃し、和帝存命中は太子を立てず、安帝期には皇后はじめ皇帝のもと乳母や宦官の讒言によって太子が廃されている。順帝の太子炳は二歳で立太子され四か月後に帝位に即いた。太子二傳に人材を得たとしても、二傳による教導は実質行われていない状態であった。

次に、筆者の前稿に依拠しつつ、後漢諸侯王の教導を掌る王の傳について検討する。後漢では、六名の皇帝（安帝・少帝・順帝・桓帝・靈帝・献帝）が、諸侯王国の王あるいは王子から皇帝となった。

## 二、後漢諸侯王の傳

### （一）諸侯王国の状況

後漢の諸侯王国は、原則的には前漢末の王国の状況と同じであり、諸侯王は国の租税収入に依拠し行政権を持たず、中央から相（王国の丞相）・中尉が派遣され、各々治民断獄、武事を掌り、王の人事権は大夫・郎官などの側近官と四百石以下の官吏に限られている。<sup>44</sup> 光武帝は宗室疏属の封国を極力抑え、自分の皇子の封地を大きくして藩屏体制を築こうとし



た。しかし、前漢初の王国のように数郡を有するほどの大きさではない。『統漢書』百官志に、「国近ければ則ち以て大なるべからず、大ならざれば則ち強たるに足らず（国近則不可以大、不大則不足為強<sup>45</sup>）」とあるように、畿外近郡（黄河下流域）に置かれ、皆小国であり、そのためか諸王は封国されても就国していない。後漢前期（光武帝・明帝・章帝）にこの傾向が強く、光武帝の皇子の場合、就国は建武二八年（五二）であり、明帝の皇子は、父帝在位中ではなく、次の章帝の死去後に就国している<sup>46</sup>。いずれも、京師洛陽で驕奢な生活を送ったとある<sup>47</sup>。

儒教国家としての後漢らしさはその封国内容にも現れており、明帝は父帝への孝道から我が子の封地を父帝の子（明帝兄弟）と等しくすべきではないとして封国歳入を二〇〇〇万錢以下とし、章帝は明帝の子（章帝兄弟）の封地歳入を四倍に増額して八〇〇〇万錢とし、自分の皇子の封国を八〇〇〇万以下に抑えた。このように自分の皇子の国を他王国より小さく封ずることは、前漢及び光武帝時には見られなかったことであり、後漢の儒術主義・経術主義の現れとされる<sup>49</sup>。武帝の時、推恩令<sup>50</sup>によって嫡子以外の諸子が父王の封地の一部を継いで列侯となり、その列侯国は近隣の郡に所属することが成文化されたが、後漢においても王諸子が列侯に封ぜられたことは同様である。列侯には県侯・郷侯・亭侯があり<sup>51</sup>、前漢との違いは、それらの封地は必ずしも父王の故地内ではなく外にも置かれたことである。郷侯や亭侯が後漢に多く見られるのは、各王国が小さい為、王諸子を領土内に封ずると、父王や嫡子の封地が著しく減少するためであり、父王の歳入をあまり減少させずに王諸子に恩恵を施すためとされる<sup>52</sup>。諸侯王国が小さいことは朝廷にとって脅威となる勢力を持ち得ないということであるが、王の違法行為に對して、後漢の朝廷はどのような態度で臨んだのであろうか。

## （二）諸侯王対策

光武帝は疏属・親属を厳別した上で、諸侯王の行状を損なう者に対しては厳しい態度で臨んだ。建武二四年（四八）、前漢に施行された「左官律」「附益律」など諸侯王に阿附する者を罰する法の徹底を命じ、建武二八年（五二）には、沛



太后郭氏（もと皇后）死去の直後に、郡県に命じて王侯の賓客数千人を誅殺した（光武帝紀下）。この背景には、建武二〇年（四四）、光武帝の子である沛王輔が賓客を使つて劉鯉（更始帝劉玄の子）の仇討ちを支援させた事件がある。當時は禁令法網がまだ嚴密ではなかったことから、京師にいた諸侯王は皆名声を揚げるために、各地から集まる名節の士と称すものを礼遇したとされ、光武帝はこれら賓客の横行を快く思っていなかったが、郭太后生存中はその次子である劉輔の責を問う可能性が生じるため賓客彈圧を行わなかったという（列伝三二、光武十王伝、沛獻王輔伝）。

明帝の兄弟は種々問題を起こした。しかし、明帝は「親親」の情を示し嚴罰に処することはなかった。中でも、楚王英は、明帝の太子時より親愛された異母弟で、前述した黄老や、浮屠（仏）の道を好んだ。明帝自身仏教への関心が有り、英の行為を責めずにむしろ僧侶や在家信者の保護を許している。しかし、英はその後、図讖（予言書）を造作して王国に官僚体系を設けたことから大逆無道として彈劾されるが、明帝は廢爵して県に徙したものの、英の母や子には咎め無しであった。しかし、英は自殺し、王の礼による葬儀が行われた。同母弟の広陵王荆は、廢嫡された東海王彊に書を送つて謀叛を勧め、彊は怖れて明帝にそのことを伝えた。明帝は、荆が同母弟であることから事を秘した。しかし荆の行状は改まることなく、天下の変事を望み、自分の容貌が光武帝に似ていることから決起時期を占うなどしたが、明帝は詳しい取り調べはせず、吏民の臣属を禁じ、相・中尉に監視させるのみであった。しかし、荆は呪詛を行った事を彈劾され自殺した。この二人以外にも異母弟の違法行為が散見されるが、いずれに対しても明帝は「親親」の情を示し領地の削減或いは徙封に留めた。

章帝は、皇族や外戚の驕奢に苦言を呈してはいるが、明帝が罰として削った県を返還するなど、諸侯王対策はさらに寛大であった。魏の文帝によって長者と称された章帝であるが、章帝の臣下は恩寵過多、過礼であるとしてしばしば諫言した。章帝の過ぎたる礼遇に対し、叔父の東平王蒼は上下の序あるべしと諫め、尚書の宋意は、過分な恩寵賜与を強く諫め、諸王を就国させるべきことを上奏している。<sup>(80)</sup>

和帝も兄弟の諸王を就国させずに京師に長く留めている。安帝以降も、諸侯王に対する皇帝の恣意的恩情や過分な賞賜が盛んに行われている。『後漢書』には、皇帝の行幸や巡狩に諸侯王が連れだつて随行する記載が頻見され、後嗣なく王が没したことで、一度は「国除」となつても、後に、王の兄弟或いは他の劉氏が封ぜられ再興されているケースが多い。

史書には、「帝は親親を以て忍びず（帝以親親不忍）<sup>(61)</sup>」或いは「朕は八辟の議を覽て、之を理に致すに忍びず（朕覽八辟之議、不忍致之于理）<sup>(62)</sup>」など、皇帝の情を以て罪が軽減される事例が多い。「親親」とは「親しきに親しむ」という儒学の徳目であり、「八辟の議」とは、『周礼』の文言で八種の人間を対象に罪を審理して減免する措置を意味し、その一番目の対象者が「親（宗室及び親屬）」である。<sup>(63)</sup> 諸侯王に対するこのような穏便な処置は、前漢代の文帝・景帝・武帝期とは対照的であり、後漢の諸侯王は、「反すれども誅せず（反而不誅）」という状況にあつたとされる。<sup>(64)</sup>

しかし他方、明帝に関しては「明察慧敏」に過ぎるとされる側面があり、<sup>(65)</sup> 諸王もそれなりに対処している様子が窺われる。太子時に共に学び常に側にいた北海王睦（光武帝の兄縝の孫）は、明帝が即位すると、王の許に集まる賓客を断絶し、音楽に専心して遊び人を装つたとされる。<sup>(66)</sup> 廃嫡され東海王に遷された彊は、子の政が「小人」であることを心配して、東海郡の返還を遺書の中で請願している。<sup>(67)</sup> 同母弟の東平王蒼は驃騎將軍に任ぜられ、礼楽の整備を進言するなど明帝の信頼を得たが、蒼の声望が増すにつれ自ら安んぜず、退官就国を申し出ている。<sup>(68)</sup> しかし、上記のような事例は明帝期に限られ、後漢の皇帝と諸侯王は「親親」の情によって繋がっていたと考える。このような状況の下、王の傳はどのような役割を果たしたのであろうか。

### （三）諸侯王の傳

#### 1. 傳の役割

前漢同様、王国の傳の任務は王を善導することである。『統漢書』百官志には、

皇子 王に封ぜらるれば、其の郡 国と為り、毎に傳一人、相一人を置き、皆二千石なり。

皇子封王、其郡為国、每置傳一人、相一人、皆二千石。

とあり、李賢注には、

傳は王を導くに善を以てすることを主り、礼は師の如く、不臣なり。

傳主導王以善、礼如師、不臣也。

と記され、傳が「礼は師の如く、不臣なり」とあることは、後漢の太子太傅と同様であり、傳の「師」としての役割が明らかにされている。しかし、「不臣」とされてはいるが、王に不徳の行いがあつた場合は、傳はその任務不履行の責めを負わされた。例えば、梁王暢（明帝子）は、明帝に最も愛幸され、章帝も先帝の意を以て厚遇したが、王は驕慢にして頻に法度を破つた。章帝没後初めて就国し、乳母や側近と共に卜筮に凝り、皇帝位を望んだとされ不道として弾劾されたが、和帝は二県を削減するに留めた。王は詫び状を送り、乳母や側近に惑わされ傳が善導しなかつたことを述べ自決する由を伝えるが、和帝は「王は素直で善良な美德の持ち主」であり、「傳と相が良くないので邪惡を防ぐことができなかったのである。」として王を許した。<sup>(69)</sup>この時の傳に対する処罰は記されていないが、恐らく何らかの責めを受けたものである。順帝時の河間王政（章帝孫）も違法行為を弾劾され、更に検督のため派遣された中央官に対して非礼を行ったことで、王と傳が詰責され、王を取り巻く姦者数十人が殺されている。<sup>(70)</sup>靈帝時には、渤海王慄（桓帝の弟）の謀叛が宦官に誣告され王が自殺した。王の妻子・妓女など百余人が下獄死、傳相以下は「王を輔導すること不忠なるを以て（以輔導王不忠）」悉く誅殺されており、これは後漢の諸侯王に対する処置としては極めて厳しい対応である。他方、傳と相が王の善行を朝廷に伝え、皇帝より賞賜された事例<sup>(72)</sup>があり、傳と相には、王や王国の動きを善きにせよ悪しきにせよ報告することが求められたのである。

## 2. 就任者

史書から判明した四人の就任者を【表3】に示した。各々の経歴及び傳としての行動をみていこう。杜林は光武帝の最初の太子彊の傳である。建武一七年（四一）、生母郭皇后が廢位され、太子彊は藩王への遷位を請願していた。彊を寵愛していた光武帝はしばらく逡巡するが、二年後に東海王に遷した。二歳での立太子以来一七年間の在位期間中、光武帝は彊の礼儀正しさを嘉みしていたとされ、廢嫡は彊自身の過失に因るものではないことを慮った光武帝は、東海国に魯郡を加えて計二九県という大封を以てし、魯に都せしめ、天子に擬えて近衛兵・儀仗兵を備えさせるなど手厚い待遇を与えて彊に対する情愛を示した。傳の人選も熟慮した結果、光禄勳の杜林を当てている。<sup>(73)</sup> 杜林は、代々太守や刺史など地方官を務めた家柄の出身で、『尚書』に通じていた。侍御史（六百石）、大司徒司直（比二千石）を経て光禄勳（中二千石）となり「内に宿衛を奉じ、外は三署を統べ、周密敬慎たり（内奉宿衛、外総三署、周密敬慎）」とあり、官吏の選拔が公平であつたとされ、群僚に尊敬されていた。就任期間は一年である。彊は、師なるを以て杜林に賞賜を与えようとするが、林は敢えて受けない。<sup>(74)</sup> これを聞いた光武帝は益々、林を重んじ、中央に戻し少府、光禄勳（再任）へと遷し大司空に就けた。何敞は、和帝即位の永元初年（八九）に、濟南王康の奢侈を諫める為に、尚書の官から急遽傳として王国に派遣された。当時朝廷では竇憲はじめ竇皇后の一族が台頭し、何敞は常々竇氏の専横を糾弾していたため竇憲に憎まれており、傳として王国に遣わされた理由は、実態は竇憲の提案によるのであつて、<sup>(75)</sup> たまたま王の不徳が問題となった折に乗じて、竇憲が何敞を地方に追い遣ったということであろう。濟南王康は郭氏所生の光武帝の子である。明帝の時に、賓客との交通を弾劾されて五県を削られているが、依然として賓客を厚遇し続けた。しかし、章帝はそれを咎めることもなく明帝が削った領地を返還している。民が水害・旱魃などに苦しむ中、康は蓄財に務め、奴婢一四〇〇人・厩馬一二〇〇匹・私田八〇〇頃を所有し奢侈な生活を送っていた。建武一五年（三九）に封公、一七年に封王、そして建武二八年（五二）に就国していて、永元初に国傳の何敞が諫言していることから、何敞が国に赴いた時には王の年齢は少くとも五〇歳以上と計

算できるが、何敞は『孝経』の諸侯の義を引いて王を教導したとされる。王は何敞を尊重して逆らうことなく傾聴したが、生活を改めることはなかったという。<sup>(76)</sup>何敞は就任一年余で汝南太守に遷されている。

程堅は、安帝時に趙王乾の傅となったが、これも王の不徳が上奏された後の派遣である。父王の喪中に不肖行為を行った等<sup>(77)</sup>のことが発覚したため一県を削られ、郎中（比三百石）であった程堅が志行有りとして傅に拔擢されており、程堅は礼儀を以て王を説諭し匡正させたという。それを報告した結果、一県は回復されている。

楊倫は、安帝によって清河王延平の傅に任命された。同年中に安帝が死去し、その死を悼んで自ら官を去っている<sup>(78)</sup>ので、在任期間はわずかである。『尚書』に通じ、傅に就く前は、郡の文学掾（教官）を務めており「人間の事に能えざるを以て（以不能人間事）」辞職し、その後は弟子千余人を教え鄧太后臨朝中は、仕官に一切応じなかったという。順帝は楊倫の罪を赦し、安帝陵で服喪を行わせている。その後、三遷して常山王の傅に補されるが病を以て就かず、閉門し弟子を教え家に没したとされる。儒林伝に載せられるほどの学識の持ち主であって、三度徴されているが、結局は下野もしくは官を免ぜられており、楊倫の理想と矜持が高すぎて仕官に耐えなかったということであろう。

これら就任者の離任後の履歴をみると、程堅については不明であるが、他の三名は皆二千石クラスの官に遷っており、これは王の傅としての見識及び能力が評価されたということであろう。

一方、これら士人の傅とは別に、後漢の諸侯王国には中傅という存在がある。この点については、次項で更に検討することにした。

### 3. 中傅

中傅は前漢より史書に見えるが、前漢においては、王の傅とは別の存在であり、宦官として王の側に在って雑用を担ったと推察される<sup>(79)</sup>。しかし、後漢では、宦官が諸侯王国の傅となった可能性が高い。中傅について、鎌田重雄氏は、前漢で

は王国の傅は士人であったが、後漢になると宦官が用いられ、諸侯王国には相当数が任命されていたとする<sup>(79)</sup>。事実、太子から遷位された清河王慶の傅には宦官衛訢が就いており、和帝末、この中傅が財物千余万錢相当を盗んだことが發覺した。和帝は王に対し、なぜ訢を弾劾しなかったかを責めるが、慶は、次の様に応えている。

訢は師傅の尊きを以て聖朝より選ばる。臣愚、唯だ言に従い事を聴かんことを知るのみ。甚だしくは糾察する所あらず。訢以師傅之尊選自聖朝、臣愚唯知言従事聴、不甚有所糾察。

和帝は王の言を嘉し、訢が盗んだ物を全て王に与えたという(伝四五、章帝八王伝、清河王慶伝)。

中傅については、明帝期の楚王英の伝に「諸国の中傅に班示す」とあり、東平王蒼の伝には中傅を介して明帝が王に手詔を与えており、蒼の没後には、章帝が中傅に命じて蒼の手になる書・記・賦などを集めさせ進呈させている。従って、中傅は明帝期から既に諸王に付けられていたことになり、王国の傅全てが宦官ではないが、宦官も傅の人選対象であったということである。一方、東平国には士人の傅が任命されている。驃騎將軍として敬重された蒼が、免官と帰国を明帝に請願していたことは前述したが、永平五年(六二)に、免官は認められなかったが帰国のみ許された。その際、明帝は蒼の部下である將軍長史(千石)を東平国の傅(二千石)に、掾(比三百石)を中大夫(比六百石)に、令史(百石)を王家の郎(二百石)に任じて王国に赴任させている。明帝のこの行動は声望ある蒼を警戒した為との詮索も可能であるが、ここは明帝が蒼を敬愛する余りの例外的処遇であると考ええる。これによって、東平国には士人の傅と宦官である中傅が置かれていたことが分かる。しかし、史書の記載を見る限り、中傅が王の師として教導した様子は見られず、その役割は皇帝の意向を王に伝達することに留まっていたようである。

王の傅は二千石の高官であり、前漢では建国当初より、全ての王国に名ある士人や儒者が派遣され厳格な教導を行っていた。儒教を重んじた後漢が、王国の傅に宦官を任命している現象をどう考えるべきなのであろうか。光武帝の時より、中常侍など従来士人が就いた官に宦官が登用されているが、宦官勢力の台頭は和帝親政以降とされる。和帝は太子時代皇



后竇氏によつて養育されており、一〇歳で即位すると、竇氏が皇太后として摂政し竇憲等竇氏一族が専横していたが、即位四年後、和帝は宦官鄭衆を使つて竇氏を一掃しており、以後、宦官の勢力が増した。順帝期では封爵された宦官が養子を取ることを許され世襲が認められている（列伝六八、宦者列伝、孫程伝）。中傳はこれら宦官勢力拡大の一面面を示すものと考えられる。諸侯王の数が多いわりには、判明する傳の数が少ないのは、宦官が多く任命されていたことにあるのではないだろうか。太子期を経ずに諸侯王から即位した皇帝については、もと乳母など女性養育従事者の存在が見えるが、男性の傳については分らない。

#### （四）後漢の傳——まとめ——

後漢の諸侯王の傳は、前漢同様、二千石の命官であり、王の善導を職掌とし、王の「師」であることが定められた。しかし、後漢における王国の傳の人選は、光武帝期を除けば、明帝期でさえ多分に名目的、形式的であることから、皇帝自身が王国の傳の役割を重要視していなかった可能性がある。その背景には、諸侯王国の力が弱小であり、もはや脅威とはなり得なかったことがある。王に叛逆心がたとえ芽生えたとしても大きくなる前に摘み取り、「親親」の情を示して刑を軽減し皇帝の恩徳を与えたこと、諸侯王を長年京師に留め就国させず、諸侯王は皇族として經書を習得する機会に恵まれていたこと<sup>(82)</sup>などから推察しても、傳を付けて王を善導させる必要性を皇帝自身が軽視した傾向がある。そのことは、宦官を王の傳に任用していること、及び、就国した王に問題が発覚した際に、士人の傳が急遽派遣されていることが証左となろう。



## おわりに

本格的な儒教国家とされる後漢王朝を、太子二傳と王の傳の在り方からみてきた。太子や王を教導する制度が整っているにもかかわらず、光武帝・明帝期を除けば、いずれも十分に機能していない。その原因を、帝室無嗣・皇太后臨朝・外戚専横・幼帝擁立・宦官勢力拡大という一連の現象に求めることはできようが、それだけではないであろう。筆者はその原因は、礼教主義にとらわれた皇帝自身の在り様ひいては皇帝をそうあらしめた後漢の後継者教育にあると考える。

前漢との比較において太子教育をみることによって、その理由を述べたい。儒学の教養が官吏登用の条件となったのは、前漢武帝の時ではあるが、太子教育に関しては、武帝は儒学だけを重視してはいない。彼は、太子が元服すると同時に博望苑を造って賓客の通行を許した。その中には異端的な考えを太子に勧める者も多くいたとされる。武帝の意図は、太子が多様な人間と考え方に接し自分で是非を判断する力を養うことにあり、太子が自ら考えることを重視した。太子二傳の人選にもその姿勢は明らかであり、地方官など行政経験を積んだ人物を登用し、彼等は特定の学問を教えるのではなく、あくまでも太子の成長を見守り育てるという姿勢に徹している。武帝以前では、文帝もまた思賢苑を造り賓客を招き入れ太子の視野を広くすることを図った。儒学が豪族及び官吏層に台頭し始めた宣帝期には、儒学者が太子二傳に登用され始めたが、宣帝が選んだ儒者は、現実には則した客観的・建設的思考を有するものであり、決して儒学經典に偏って理想のみに固執するものではなかった。しかし、儒学に傾倒した元帝の頃から古礼遵守を信奉する学者が二傳に登用され始め、これらは丞相や御史大夫に至った。この傾向は成帝・哀帝を経て前漢末まで続き、その結果、高祖以来の伝統や祭祀が大幅に改革され、同時に皇帝權威の失墜と帝室の弱体化を世に露呈させた。帝室が古礼遵守の是非に揺れ動いている間、洪水・旱魃・流行病などが頻発し、民は困窮の極みにあった。このような状況の中で、成帝自身が、民が苦しんでいるにも

拘わらず礼儀が興ることを望むのは、なんと難しいことであろうかと、儒学の「礼」そのものの在り方に疑問を呈している。

しかし、後漢の光武帝は、儒学を統治理念の中心に据え礼教を重んじた。太子教育においても太子が礼容と儒学の学識を身につけることを望み、その願いは太子即位後の明帝によって叶えられたと言えるが、明帝は決して儒学のみに縛られることなく、法術に通じ、黄老を知り、西域の仏道にも興味を示すなど視野の広さを持っていた。しかし、章帝以降の皇帝は儒学とその礼教主義に拘束され、礼制の整備化（煩雑化）や経義の統一により皇帝権を強化しようとした。反面、民の範となるはずの帝室内部は正当な理由なく太子が廃されており、以後、皇太后の摂政と外戚専横の流れを生む。後漢後半は帝室無嗣の状況の中で、諸侯王や王子が皇帝と為ることで、かろうじて皇統が保持されたが、これらの皇帝は、皇后とその外戚・皇后とその外戚・皇帝のもと乳母・皇帝の生母・宦官など皇帝周囲を取り巻く人間の恣意と私欲に翻弄され国家を私物化した側面が強く、統治者としての公正さ、国の現状を知り適切な判断を下すという君主としての責務を認識しているようにはみられない。極言すれば、後漢後半は、皇帝自身を含め帝室全体が、「礼」や「孝」という儒教の徳目を標榜するのみで、実際の言動は極めて非儒教的であり、そこには建国時に光武帝が目指した民の平和を願う姿勢はもはや見られない。太子や諸侯王教育の制度が整っていても、制度が制度としてのみ存在し、実態は規定した方向に進んでいない。これは、表面的形式主義に陥りかねないという礼教主義の負の側面の現れであり、その徴候は、前漢元帝期に兆し、後漢では章帝期より始まっていたと考える。以上、太子二傳と王国の傳を中心に後漢の後継者教育を述べた。「傳」に限定したことから、導き出した結論におそらく何らかの偏重があるだろうことは否めない。今後の課題として、後漢後半における劉氏宗室メンバーが、帝室の動きをどのように捉えどどのように行動したのかを探りたい。<sup>(84)</sup>

注

(1) 賈誼は、文帝時に最年少で博士となった儒学者であり、施政について多くを献策することにより文帝に信頼された。文帝が寵愛する梁王揖の太傅となったが、揖は落馬して夭折し、その二年後賈誼も若くして没した（『漢書』卷四八賈誼伝）。

(2) 皇帝の後嗣を「皇太子」と称したのは、劉邦（前漢創始者）が皇帝に即位した高祖五年（前二〇二）が最初である。それ以前には、国君後嗣は太子あるいは世子と称され、太子・世子の区別は定まっていない。太子・世子の呼称に関して、『白虎通』の鄭玄注に「周制、太子世子、亦た定まらざるなり。漢制、天子は皇帝と称し、其の嫡嗣は皇太子と称し、諸侯王の嫡は世子と称し、後代咸之に因る（周制、太子世子、亦不定也。漢制、天子称皇帝、其嫡嗣称皇太子、諸侯王之嫡称世子、後代咸因之）」とある。本稿は、漢代を対象としており、本来ならば「皇太子」とすべきであるが、便宜上、「太子」という語句を使用する。

(3) 齊藤幸子「前漢の太子太傅」（お茶の水女子大学「人間文化創成科学論叢」一一、二〇〇九）。しかし、この考察では、宣帝期と元帝期の太子二傳の比較が充分に行われていない。本稿で後述する「前漢の太子二傳」に簡略的ではあるが、宣帝・元帝期の太子教育の違いを補足した。

(4) 齊藤幸子「前漢諸侯王国の太傅」（『日本秦漢史研究』一一、二〇一一）。なお、王国の傅は、前漢成帝の綏和元年

（前八）以前は太傅と称した（『統漢書』百官志、王国条）。

(5) 先行研究であるが、漢代の太子二傳についての専論は極めて少ない。漢代の太子教育については、下記の論考がある。安作璋・熊鉄基『秦漢官制史稿』（齊魯書社、一九八四）は、秦漢の官制を考察したものであるが、太子教育制度を含み、太子二傳についても述べる。王健「漢代君主研習儒学伝統的形成及其歴史效应」（『中国史研究』、一九九六第三期）は、太子教育の具体的内容を考察している。閻步克「漢武帝時“寬厚長者皆附太子”考」（『北京大學學報』哲学社会科学版、一九九三）は、武帝時の太子周圉の長者と称される人々を検討している。蘇鑫「漢代皇太子制度考述」（吉林大學、碩士論文、二〇〇七）は、太子教育制度に主眼を置く。いずれも、太子教育と太子二傳について触れているが、制度面からの考察あるいは概略的であり、就任者の分析には及んでいない。而漢代の諸侯王の傅についても、専論は少ない。僅かに、後漢の傅について、鎌田重雄「後漢の王国」（同『秦漢政治制度の研究』日本學術振興會、一九六二）が、王国の中傅について触れている。

(6) 渡邊義浩氏は、「儒教」を経学を含めた儒家の教説の総称と解した上で、「儒教国家」成立の指標を、1. 思想内容としての体制儒教の成立、2. 制度的な儒教一尊体制の確立、3. 儒教の中央・地方の官僚層への浸透と受容、4. 儒教的支配の成立、の四点に置き、「儒教国家」の成

立時期を後漢光武帝期から後漢章帝期の白虎観会議である、とする（同『後漢における「儒教国家」の成立』（汲古書院、二〇〇九、二三―二五頁）。「儒教国家」の成立時期については諸説あり、ここでは措く。本稿が後漢を「儒教国家」とする理由は、光武帝が儒教を統治理念の中心に据えて建国したという意味合いであり、それは、本稿の目的である太子教育従事者とその教育内容を考察すること、より明らかになると思われる。

(7) 官僚の等級を示すもので、万石から、中二千石、二千石、比二千石、千石、比千石、八百石、六百石、比六百石、五百石、四百石、比四百石、三百石、二百石、比二百石、百石と分かれていた。これらの数は本来俸禄高を穀物の重量によって示していたが、漢代では、ただ等級を示すだけで俸禄とは一致していない。二千石は、中央の大臣クラスに次ぐ高位である。

(8) 長者については、次のような見解がある。「漢初には黄老思想と任侠的気風とを土壤とした「長者」という理想的人物像が形成され、彼等は贈与と互酬の世界の中で、惜しみなない贈与を行い得るような人物であり、弁舌さわやかな、詩文の才豊かで、才気や教養あふれる、そのような人物はむしろ否定的評価を受けた。」以上、山田勝芳「前漢時代の地方「文人」のありかた」（『中国文人の思考と表現』汲古書院、二〇〇〇、所収）より引用した。黄老、任侠については、本稿の注（16）（17）を参照されたい。

(9) 『世界歴史大系中国史1』（山川出版社、二〇〇三）五一頁より引用した。

(10) ちなみに、前漢二一〇年のうち、太子空位期間は九九年弱である。数字については、岡部毅史「梁簡文帝立太子前夜―南朝皇太子の歴史的位置に関する一考察―」（『史学雑誌』一一八一、二〇〇九）の表2を参考とした。

(11) 『漢書』の作者班固の父であり、『漢書』の一部は班彪の手になる。

(12) 『大戴礼記』は、前漢宣帝期の礼学者である戴徳が、戦国時代から前漢半ばにかけて伝わっていた礼古経五六篇・経一七篇・記一三一篇計二〇四篇から、八五篇を選び編纂したものである。一方、『礼記』は、戴徳の兄の子である戴聖が別に四九篇を選んだものである。『大戴礼記』保傅篇と『礼記』文王世子篇には、いずれも周の文王・成王など古代の聖王に仮託した理想の太子教育が述べられている。以上、『中国教育（上）』（玉川大学出版部、一九七二）の加藤常賢著叙説を参照した。

(13) 隴西の隗純（隗囂の子）が亡んだのは建武一〇（三四）、蜀の公孫述の死によって蜀が平定されたのは建武一二（三六）である。

(14) 彊豪とは、強い勢力を持つ豪族層を意味する。

(15) 漢代、都の長安周辺を三分割した行政区の一つであり、長安以北の地域を指す。またその長官をも謂う。官秩は中二千石で中央官府の大臣クラスである。ちなみに前漢では

二千石である。

(16) 黄老とは、黄帝（伝説上の帝王）と老子を指すが、黄老思想とは道家思想の一派であり、老子が唱えたとされる無為自然の道家思想に、法家の政治術を融合させた思想を謂う。戦乱後の百姓を安集させる為に、無為清静を標榜して国力の速やかな回復を図るという極めて実践的な政治術であるとされ、戦国時代から前漢初に隆盛した。黄老思想については、金谷治『秦漢思想史研究』（日本学術振興会、一九六〇）に詳しい。

(17) 強者をくじき弱者を助け、正義のために生命を投げ出すほどの気構えを持つことが任侠的精神であり、この考えが春秋中期以後出現した游侠と呼ばれる人々の活動を支えたとされ、漢代においては、民間秩序として広がり人々を繋いでいたと言われる。増淵龍夫「漢代に於ける民間秩序の構造と任侠的習俗」（同『中国古代の社会と国家』（弘文堂、一九六〇、所収）に詳しい。

(18) 高祖時の太子（盈、のちの恵帝）を教導した前漢最初の太子太傅であり、漢朝の諸々の儀礼法式を制定した（『漢書』卷四三叔孫通伝）。

(19) 『二十五史補編』の「補後漢書年表」に拠れば、前任者戴渉の下獄死により建武二〇年四月に太中大夫張湛が大同徒に為るが「疾罷」し、同年六月には蔡茂が後任と為ったことが記されている。狩野直禎「後漢政治史の研究」（同朋舎出版、一九九三）の一八六頁にも、張湛が「太子太傅

から太中大夫になって大司徒となった」とあり、「老人であるが人格的に信頼できる張湛」が（大司徒に）選ばれたが、「しかし病と高齢のためわずか二か月で辞職した」とされる。

(20) 後漢では、太尉・司徒・司空の最高位三官（建武二七年以前は、大司馬・大司徒・大司空）をいい、官秩は万石である。各々、前漢末の大司馬・丞相・御史大夫にあたる。

(21) 宋弘（大司空）・伏湛（大司徒）がおり、卓茂は太傅となっている。前注（19）狩野直禎書の一二二―一二三頁を参照した。

(22) 光武帝紀上。

(23) 桓榮は建武一九年（四三）、荘が立太子された時に六〇余歳で始めて大司徒府に辟召されている（伝二七、桓榮列伝）。

(24) 国家の礼儀祭祀を掌る大臣。官秩は中二千石である。

(25) 明堂では大典を挙行し、霊台では天文・氣象観測を行い、辟雍では礼楽教化を宣布する。

(26) 国三老とともに、国家に貢献した有徳の高齢者をいう。

(27) 礼儀志上に三老五更に対する朝廷の儀式が詳細に記されている。

(28) 老人を勞り養うことを旨とする儀礼。

(29) 前注（19）所掲狩野書の二二五頁を参照した。

(30) 加藤常賢『書経』（新釈漢文大系25、明治書院、一九

八三)の宇野精一氏による解説を参照した。

(30) 狩野直喜『御進講録』(みすず書房、一九八四)。この書は、大正末から昭和初年、前後四回にわたって行われた進講録であり、『尚書』を基に東洋政治の理想を史実・制度との関連において述べたものであるとされる。

(31) 「皇太子嘗て攻戦の事を問う。帝曰く、「昔衛の靈公陣を問うも、孔子、对えず。此れ爾の及ぶ所に非ず」と。(皇太子嘗問攻戦之事、帝曰、昔衛靈公問陣、孔子不對、此非爾所及)」とある。

(32) 光武帝紀下に、かつて太子(明帝)が、光武帝が休まず政務に励む様子を見て、「今度は黄老養生の道に沿って少し休息されたらどうか」と労り諫めると、光武帝は「我はこれを楽しんでおこなっているのだ。疲れは感じない」と答えたとある。狩野直禎氏は、この事例を引き、光武帝は「文帝時代の儉約を模範としながらも、文帝時代の黄老無為の方針は受け継がず、経理を講論し、儒教精神を政治の中心に置いた。」とする。前注(19) 狩野書の二〇三頁を参照した。

(33) 漢代の官吏登用法の一つ。郡国の地方官が孝行者で清廉な者を官吏に推薦した。

(34) 郎官を指し、皇帝の側近に宿衛して其の身邊を護衛する官であり、漢代の官僚は、まずこの郎官に就き漸次昇進していくのが原則であった。

(35) 侍中は比二千石である。李賢注に「員無し。左右に侍

り衆事を賛導し、顧問応対することを掌る。(中略)本と僕射一人有り。中興(後漢)に転じて祭酒と為し、或いは置き或いは否らず(無員。掌侍左右、賛導衆事、顧問応対。(中略)本有僕射一人、中興転為祭酒、或置或否)」とあり、皇帝の顧問応対をする侍中の筆頭である(『統漢書』百官志三)。

(36) 「父任」による仕官すなわち任子制は、漢代を通して行われた官吏登用法であり、吏二千石の官に三年以上在職した者の兄弟あるいは子一人が郎になり得る制度である(『漢書』卷一一哀帝紀の応劭注)。

(37) 前注(19) 所掲狩野書の三八二頁を参照した。

(38) 狩野直禎氏は、懿の年齢を廃嫡された保と同年輩であると推測している。前注(19) 所掲狩野書の四二四頁を参照した。

(39) 閻皇后は安帝に寵愛された保の生母李氏を嫉妬の念により鳩毒で殺している(皇后紀下、閻皇后条)。

(40) 当時の知識階層を構成する人々であり、儒者官僚・逸民的人士・太学生・門生・遊俠的富豪などが含まれる。清流とは、豪族である士大夫達が中核となった政治的連合体をいう。これに対して宦官とそれに結託する豪族を郷里社会の秩序を破壊するものとして「濁流」とみなした。以上、東晋次『後漢時代の政治と社会』(名古屋大学出版会、一九九五)第六章第二節を参照した。

(41) 前注(19) 所掲狩野書の三八四頁を参照した。



(42) 国家財政全般を掌る責任者であり、全国の農業生産の管理、国家財政に組み込まれる諸税の徴収および輸送、戦費や官僚の俸給などの支出はその管轄業務である。

(43) 列伝の贊に「李と杜は職を司り、心を朋<sup>とも</sup>じくし力を合す。主を文・宣に致さんとし（李・杜司職、朋心合力。致主文宣）」たとあり、終に讒言者の犠牲になったとある。

(44) 鎌田重雄「後漢の王国」（同『秦漢政治制度の研究』日本學術振興会、一九六二）を参照した。

(45) 『続漢書』百官志、王国条の劉昭注。

(46) 光武帝の皇子は、東海王彊が封国九年後、沛王輔・楚王英・濟南王康・淮陽王延は一年後に就国した。明帝の皇子については、陳王羨は封国されて二八年後、彭城王恭・樂成王党は二二年後、下邳王・梁王囂は一六年後であり、淮陽王昞は京師に留まり一六年後に没しそのまま京師に葬られた。章帝期では、清河王慶が二二年後、濟北王寿・河間王開が一四年後である（列伝三二光武十王伝、同四〇孝明八王伝、同四五章帝八王伝）。

(47) 章帝期の諸侯王が都に留まり驕奢な生活を送る様子が次のように記されている。「又西平王羨（明帝の皇子）等六王は、皆な妻子ありて家を成し、官属備具したれば、当に早く蕃国に就き、子孫の基趾を為すべし。而るに室第相いい望みて久しく京邑に盤<sup>とど</sup>まり、婚姻の盛なること、本朝に過ぎ、僕馬<sup>おほ</sup>の衆きこと、城郭に充塞し、驕奢にして僭擬<sup>せんぎ</sup>、寵禄は隆んに過ぎたり（又西平王羨等六王、皆妻子

成家、官属備具、当早就蕃国、為子孫基趾。而室第相望、久盤京邑、婚姻之盛、過於本朝。僕馬之衆、充塞城郭、驕奢僭擬、寵禄隆過）」（列伝三一、宋均伝）。

(48) 封地から上がる田租・山林魚池税・果樹野菜税等を錢に換算して二〇〇万錢の意である。宇都宮清吉「劉秀と南陽」（同『漢代社会経済史研究』弘文堂、一九五四、所収）を参照した。

(49) 前注（44）鎌田論文を参照した。

(50) 前漢武帝期に施行された推恩の令は、諸侯王が嫡子以外の王子に封地を分与して列侯とすることを認めるものであるが、その際、王子侯国は必ず漢の郡に所属させたとされる。以上、鎌田重雄「漢朝の王国抑損策」（前掲注（44）鎌田書所収）を参照した。

(51) 『続漢書』百官志、列侯条、李賢の注に、「功の大なる者は県を食み、小なる者は郷・亭を食み、其の食む所の吏民を臣と為すを得。（中略）武帝元朔二年、諸王をして推恩して衆子に土を分けるを得さしめ、国家為に封じ、また列侯と為す（功大者食県、小者食郷・亭、得臣其所食吏民（中略）武帝元朔二年、令諸王得推恩分衆子土、国家為封、亦為列侯）」とある。

(52) 前注（44）鎌田論文を参照した。

(53) 「有司に詔して旧制の蕃王に阿附するの法を申明せしむ（詔有司申明旧制阿附蕃王法）」とある（光武帝紀下）。

(54) 「夏六月丁卯、沛太后郭氏薨じ、因りて郡県に詔して王



侯の賓客を捕えしめ、坐死する者数千人（夏六月丁卯、沛太后郭氏薨、因詔郡県捕王侯賓客、坐死者数千人）」とある。

(55) 更始帝は、光武帝の族兄で、地皇四年（二三）に即位したが、二年後、劉盆子を擁立した赤眉軍により殺されている。劉鯉は劉盆子兄弟を父の敵としていた。

(56) 李賢注所引『後漢紀』に、明帝が金人を夢に見、その長大にして項に日月の光が輝いていたことを群臣に問うと、或る者がそれは西方の仏であろうと応える。明帝は「之に於いて使を天竺に遣わし、其の道術を聞いて其の形像を図せしむ（於是遣使天竺、問其道術而図其形像焉）」とある（列伝三三、光武十王伝、楚王英伝）。

(57) 建初二年（七七）春三月の詔に「比年陰陽不調にして飢饉屢々臻る。深く惟うに、先帝人の本を憂い詔書して曰く『財を傷はざれ、人を害せざれ』と。誠に元元の末を去り本に帰らんと欲す。而るに今の貴戚近親は、奢縦なること度無く、嫁娶送終は、尤も僭侈を為す。（中略）其れ科條・制度の宜しく施行すべき所、事に在る者は備に之が禁を為り、京師を先にして諸夏を後にせよ（比年陰陽不調、飢饉屢臻。深惟先帝憂人之本、詔書曰『不傷財、不害人』、誠欲元元去末帰本。而今貴戚近親、奢縦無度、嫁娶送終、尤為僭侈。（中略）其科條制度所宜施行、在事者備為之禁、先京師而後諸夏）」とある（章帝紀）。

(58) 章帝紀の「論」に「魏文帝称す、『明帝察察たり、章帝

は長者なり』と。（魏文帝称明帝察察、章帝長者）」とある。

(59) 列伝三三、光武十王伝、東平憲王蒼伝。

(60) 列伝三一、宋均伝、宋意伝。

(61) 列伝三三、光武十王伝、楚王英伝。

(62) 列伝四〇、孝明八王伝、樂成王蓂伝。

(63) 八種の人間とは、一に親（宗室・親属）、二に故（旧知）、三に賢（賢者・有徳者）、四に能（政治や軍事上の能力者）、五に功（元勳や大功労者）、六に貴（高爵位者）、七に勤（国事に精励した者）、八に賓（天子の賓客）である。以上、『周礼』秋官の小司寇条。

(64) 伝三三光武十王伝の阜梁質王延伝の李賢注には、『漢書』を引いて「大逆無道なれば、父母、妻子、同産は少長と無く皆な棄市（大逆無道、父母、妻子、同産無少長皆棄市）」とある。また、『春秋公羊伝』の「君親には将にせんとすること無し。将にせんとすれば必ず誅す（君親無将、将而必誅）すなわち君主と親に対しては、殺そうと思ふことすらない。心に思つただけで誅殺されるべきである、とする一文が引かれている。

(65) 列伝三一、鍾離意伝。

(66) 列伝四、宗室四王三侯伝、北海敬王睦伝。

(67) 列伝三三、光武十王伝、東海恭王彊伝。

(68) 「顕宗甚だ之を愛し重んず。即位するに及んで、拜して驃騎將軍と為し、長史掾史の員四十人を置き、位は三公の上に在らしむ。（中略）蒼、朝に在ること数載、隆んに益

する所多きも、而れども自ら至親にして輔政し、声望日ごとに重きを以て、意に自ら安んぜず（顕宗甚愛重之。及即位、拜為驃騎將軍、置長史掾史員四十人、位在三公上。（中略）蒼在朝數載、多所隆益、而自以至親輔政、声望日重、意不自安）」とある（伝三二、光武十王伝、東平憲王蒼伝）。

(69) 列伝四〇、孝明八王伝、梁王暢伝。

(70) 列伝四五、章帝八王伝、河間王開伝。

(71) 列伝四五、章帝八王伝、千乘王伉伝。

(72) 彭城王和は、母の服喪を陵の傍で憔悴するまで行つた。桓帝は王を徴し牛酒を与えたとある（列伝四〇、孝明八王伝、彭城王恭伝）。

(73) 「故に重く官属を選び、林を以て王の傳と為す（故重選官属、以林為王傳）」とある（列伝一七、杜林伝）。

(74) 李賢注所引『東觀漢記』に、「王は又師なるを以て数々饋遺（贈物）を加えしも、林は敢えて受けず。常に辞して以わく、道上の稟飯（道中の支給）余り有つて苦しむに車重きことを以てし、之を置く所無しと（王又以師數加饋遺、林不敢受、常辞以道上稟飯有余、苦以車重、無所置之）」とある。

(75) 列伝三三、何敞伝。

(76) 列伝三一、光武十王伝、濟南安王康伝。

(77) 列伝四、宗室四王三侯伝、趙王良伝。

(78) 『漢書』卷六武帝紀建元三年条に「濟川王明は太傅・中

傅を殺すに坐し、廃され防陵に遷さる（濟川王明坐殺太傅中傅廢遷防陵）」とあり、応劭注に「中傅、宦者也」とある。

(79) 前注（44）所掲鎌田論文を参照した。

(80) 列伝三三、朱穆伝の李賢注所引『漢官儀』。

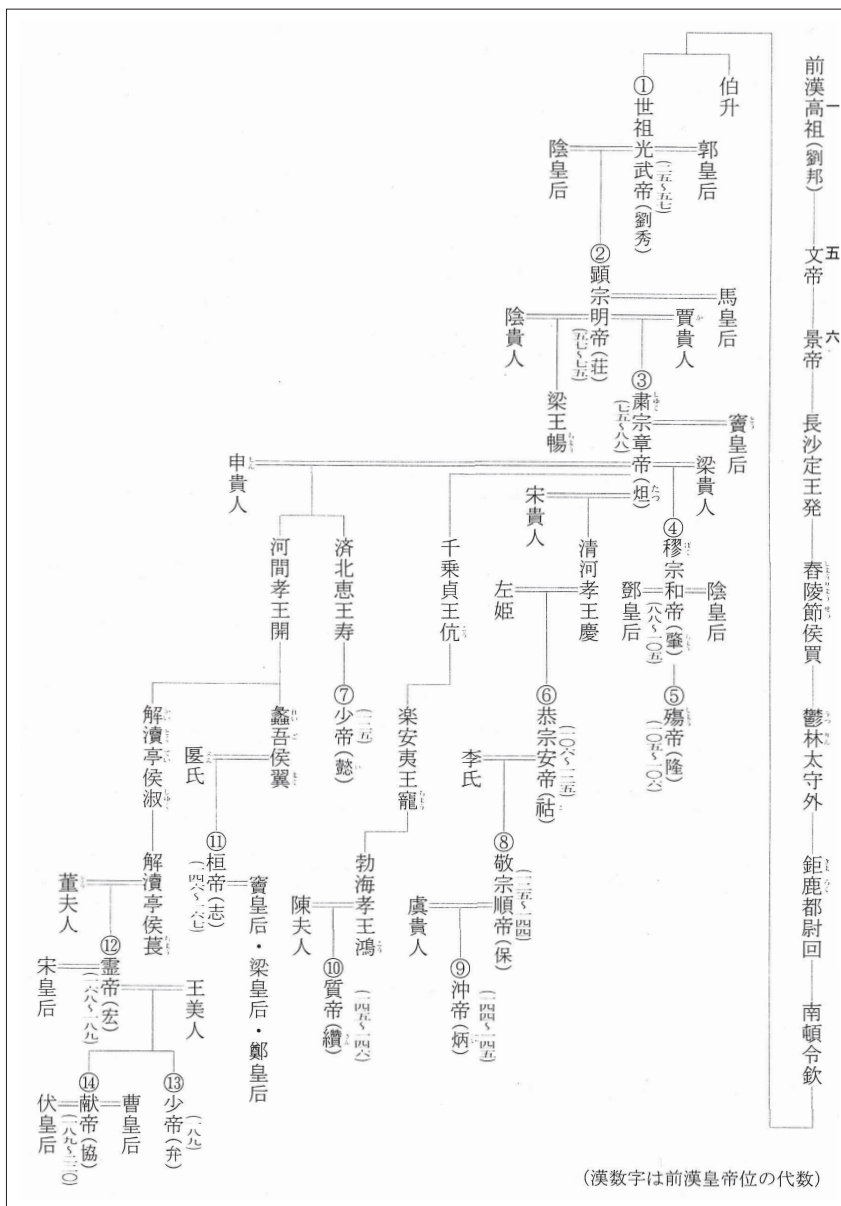
(81) 安帝乳母王聖・順帝乳母宋娥・靈帝乳母趙嬀がいる。彼女等は、王の帝位擁立に何らかの形で関わり、即位後に封爵されている。各々、順帝紀・列伝五一左雄伝・列伝五六陳蕃伝に記載がある。

(82) 列伝六九上、儒林伝の劉昆伝に「乃ち入りて皇太子及び諸王・小侯五十余人に授けしむ（乃令入授皇太子及諸王小侯五十余人）」とあり、明帝紀永平九年条の李賢注には、『後漢紀』を引いて「永平中、儒学を崇尚し、皇太子・諸王侯より功臣の子弟に及ぶまで、経を受けざるは莫し（永平中崇尚儒学、自皇太子、諸王侯及功臣子弟、莫不受経）」とあり、また明帝紀永平一五年条に「皇太子・諸王に命じて経を説かしむ（命皇太子、諸王説経）」とあり、諸王は太子と同席して経学を学ぶ機会が度々あった。

(83) 『西京雜記』卷上。

(84) 専論の一つに原秀行「後漢の桓・靈帝期における宗室劉氏の政治生活」（青山学院大学東洋史論集『東アジア世界史の展開』、汲古書院、一九九四、所収）がある。

（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）



【表1】後漢皇帝の即位前の状況

皇帝	即位年	廃嫡	即位前の地位	長子/不	備考	『後漢書』
光武帝	25					光武帝紀
		太子彊		光武帝長子	太子→東海王	列伝32
明帝(莊)	57		太子	光武帝第四子		明帝紀
章帝(烜)	75		太子	明帝第五子		章帝紀
		太子慶			太子→清河王	列伝45
和帝(肇)	88		太子	章帝第四子		和帝紀
殤帝(隆)	105		太子	和帝少子		和帝紀
安帝(祐)	106		長安侯	和帝兄(慶)の子	章帝孫	安帝紀
少帝(懿)	125		北郷侯	濟北王寿の子	章帝孫	安帝紀
順帝(保)	125	(廃嫡)	済陰王	安帝の子	太子→済陰王 →順帝	順帝紀
沖帝(炳)	144		太子	順帝の子	章帝玄孫	順帝紀
質帝(續)	145		建平侯	渤海王鴻の子	章帝玄孫	順帝紀
桓帝(志)	146		蠡吾侯	蠡吾侯翼の子	章帝曾孫	桓帝紀
靈帝(宏)	168		解瀆亭侯	解瀆亭侯良の子	章帝玄孫	靈帝紀
少帝(弁)	189		皇子	靈帝の子	廃位→弘農王	靈帝紀
献帝(協)	189		陳留王	靈帝の子		献帝紀

【表2】後漢の太子太傅と太子少傅

就任者	皇帝	太子名と在位期間	就任期間	前職(官秩)	離任後の履歴	『後漢書』 列伝
王丹	光武帝	彊(廃嫡→東海王) 2～19歳(AD26～43)	30～31	左馮翊(中二千石)→ 太子少傅(二千石)	太子太傅(中二千石) →卒家	17
張湛	〃	〃	31～43	光祿大夫(比二千石)	太中大夫(千石) →大司徒(万石)→卒家	17
張佚	〃	莊(明帝) 16～30歳(43～57)	52～	博士(比六百石)	卒家?	27
桓榮	〃	〃	52～	博士	太常(中二千石)	27
甄宇	〃	〃		博士	卒官	69下
張興	明帝	烜(章帝) 4～19歳(60～75)	67～71	侍中祭酒(比二千石)	卒官	69上
桓焉	安帝	保(廃嫡→濟陰王→順帝) 6～10歳(120～124)	120～121	侍中歩兵校尉(比二千石) →太子少傅(二千石)	太子太傅(中二千石) 光祿大夫→太常(中二千石) 順帝即位時、太傅(万石)	27
杜喬	順帝	炳(沖帝) 2～2歳(144～144)	144	侍中(比二千石)	大司農(中二千石) ～太尉(万石)	53

注) 網掛け部分は、太子少傅を表す。

【表3】後漢の諸侯王の傅

傅	王	皇帝	前職(秩)	離任後	備考	『後漢書』伝
杜林	東海王彊	光武帝	光祿勳(中二千)	少府(中二千)～大司空(万)	就任期間一年	17
何敞	濟南王康	和帝	尚書(六百)	汝南太守(二千)、免官、 和帝時中郎將(比二千)	就任期間一年余	33
程堅	趙王乾	安帝	郎中(比三百)			4
楊倫	清河王延平	安帝	博士(比六百)	侍中(比二千)		69上